こころのあり方

道品の巻

目次

見佛往生に二種機類……一
起行門……八
難思光信仰喚起……一〇
恩寵喚起五正行……一三
四神足……一九
五根……二三
宗趣……二五
開發位……二九
心靈開發……三五
七覺支……三六
啓示の三種……四〇
更生……五〇

見佛往生に二種機類

見佛往生とは、禪に謂ゆる見性成佛のことにして、見佛往生の二機とは、頓と漸となり。

頓機の人は階級に互らず、一超直入如來地、一心不亂念佛三昧に入らば、機緣忽ちに淳熟して見佛し、頓に心機一轉して、光明の生命に入るは、斯の如き機類、皆世に三昧を行じて、機緣熟するが故に、頓に三昧發得して、佛光に照されて、無明の我が命終して、靈的我と更るなり。

漸機とは、初發心より、見佛往生に至るまで、漸次に其道を進むるなり。初め佛種を播下して、信念萠發し、心靈花開き、靈の果を結ぶに至る。其方法を道諦とす。此の道を具さに七科三十七道品とす。

斯の三十七道品なるものは、大小、聖淨に通じて、靈的生活の道程に於て、同形

式たる事は、例へば植物中高等なる樹木も、微細なる草類に至る迄、種子より萠發し生長し、花開き、果實を結ぶに至る迄の、生活の形式は同一なるが如し。

心靈的生活が、初めて種子を播し、竟に究竟圓滿なる狀態に至る迄の道程の形式は同一である。之を具に三十七道品とす。

三十七道品とは、

四念處。
四正勤。
四神足。
五根。
五力。
七菩提分。
八正道分。

三十七道品を能く會得して、之に順じて階むことは、恰も科學が階級に互つて、科目を順次に授業を授かつて行くがごとし。

念佛三昧の靈的生活の開發は、一心念佛して、三昧發得したる人にして、三十七道品の科目を知らざるも、學說的の道品の名義を未だ識らざるも、實際に修行して、單直仰信に眞直に突進して、三昧發得する人の如きは、未だ必ずしも三十七道品の學說に於ては識らざるも事實は已に深く進入して奧堂に達するあり。それらは道品の名は識らざれ共其心理狀態に於ては一一其の道品と合して毫も違せず。

美濃國に一の老尼あり、道心堅固にして念佛勇猛にして三昧發得す。其の老尼に覺支の心理狀態を說示するに、一々其の心相と相應して違はず一々肯定して實に爾りとす。

昔し魯鈍なる農夫が、俄かに發心し、優婆掬達尊者の化導に依つて、忽ちに羅漢果を得たる如し。羅漢果に至るとは、三十七道品の道程と七賢七聖の階級を過れども、

彼の老農夫何ぞ其の階級を知らん。然れども其心理狀態を一々に試し驗すれば必ず符合すべし。

今は念佛三昧に依つて、見佛往生の道程を立て、行者の便に資すべし。

一、四念處。

一に身は不淨と觀じ、二に受は苦と觀じ、三に心は無常と觀じ、四に法は無我と觀ず。

四念處は初めは身次の三は心の色受想行識の五蘊に他ならず。即ち吾が本來の身と心とは、不淨と、苦、無常と、無我と信認するなり。

人の本來の缺點を信認するは、宗教の要を來す所以なり。人は本完全無缺の性能たらば宗教の要なし。また人宗教に依らざるも、自ら解說し成佛し得るものとすれば亦宗教の要あらざるなり。苦空無常無我の、罪惡劣機の我は死して、常樂我淨の彌陀の佛子と生れ更る處に、宗教の要と能とある所以なり。

如來は常樂我淨なり。念佛三昧の宗教、こゝに不淨苦無常無我の我を、彌陀に歸命して、自己を献ぐるなり。

常樂我淨、四德圓滿の彌陀の種子なる名號を以て種子となす。

身 — 不淨——消極——自己
　　清淨法身——積極——如來
受 — 苦——自己
　　樂——如來
心 — 無常——自己
　　常住——如來
法 — 無我——不自在——自己
　　大我……自在——如來

美 / 眞 / 善

四正勤
- 已生惡
- 未生惡
- 已生善
- 未生善

善惡の標準は自己即ち肉の身心より——我私——衝動するを惡とす。

如來神聖公明なる至善なる如來よりを善とす。

一心念佛して、信念萌發する時は、從來の吾は非惡なるを覺醒せん。

善とは眞實に如來を信ずる眞實如來を信ずる時は自己の罪惡なるを認め如來を信賴する。我に自己の救濟能はざることを信じ、益々如來の萬德圓滿、すべてを献げて如來を歸命頂禮するに無上の尊敬を生ず。

如來は眞理と慈悲と信ずる時は深く如來を愛し奉る、如來を愛して、是諸〻の善の根本なる此の心を生ずる時に已に得たらば退轉せずして向上せんことを。

要は至善圓滿なる如來に向つて向上するにある。

四念處

身 — 現在我身不淨、無量(垢穢)過失、積聚する處。
　　如來內外清淨、相好圓滿、無量功德、積聚する處。
受 — 我受動的感情、諸憂悲苦惱恐怖等。
　　如來大慈悲、拔苦與樂、歡喜妙樂、他受法樂を與へ給ふ。
心 — 意志、不斷、活動、遷流、不正、無常。
　　如來、常住不變。

(以下斷絕)

起行門（又宗教倫理）

起行即ち濟度過程とは或は波羅密多とも或は道諦とも云ふ。また正行道とも、初發心より信機開展して實行行動に到る過程にして、信仰と恩寵との關係に依つて衆生の惡質脱却し、靈化即ち菩提心が波羅密に行動すべき進化發達して彼岸に到達すべき程路なり。

人は絶對眞心、阿彌の理性の個人として、本來佛性を具有す。譬へば輪王の聖子、卑婢の胎に宿るが如し。若し成育の後には四天下に主たるべきが如し。衆生は阿彌の個體として、本能的に聖靈化すべき性能を具す。之を正因佛性と名づく。然るに性能は具するも、緣因佛性即ち法界緣起の阿彌の恩寵に緣らざれば、佛聖種を萠發し、圓滿に開展して、神聖靈化の了因佛性を顯現することなし。

本來衆生佛性即ち阿彌の分子なる性能、衆生の本能内に有することに、種々の譬を擧げたり。或は鑛石に純金の性あるが如し。また窮子衣中に摩尼寶珠を納むるの譬あり。

これを開展するは必ず絶對の（　）能なる恩寵に非るよりは他に道あることなし。故に般舟に三世一切諸佛念彌陀三昧によつて正覺を成ずと。

經に十方無碍人一道より生死を出づ。一道とは一無碍道、即ち衆生阿彌の終局に歸する道なり。

阿彌は絶對にしてまた神聖態なり。各自の垢質脱却して靈化の意志として、個人も悉く神聖態ならざるべからず。

之と反對に衆生佛性具有して、恩寵によりて解脱靈化せざるものは、無明垢質の心性にして、加ふる罪業の素質に覆はるゝ故に、自ら三惡四（流）等の迷惑免るゝことの能はず。

佛性あるが故に佛化し、惡素質あるが故に佛と分別す。いかゞに此の佛性を開發し

いかに惡素質を脱して結局致一的に活動すべきやとならば、初發心宗教的憧憬より實行にいたるまで三階級とし、

一、資糧位（又信仰喚起）
二、見道位（また開發）
三、修道位（また實行）

（初）難思光　信仰喚起

客體の難思光とは衆生の方面の信仰喚起にして、衆生本能的に佛性あり、又阿彌絶對にして一切處に周遍せざる處なきも、屬性たる阿彌の性能、一切慧一切能、及び若しは妙色莊嚴にいたるまで一切處に遍滿して充塞すれども衆生が之を識らず。生盲の日光の色を見ざるが如し。信論に、若し諸佛に自然の業あつて、能く一切處に現じて利益せば、衆生若しくは其身を見、神變を觀ん。世間多く見ざるは何故ぞ。答へて。如來法身平等一切處に遍して作意有ることなし。故に自然と名く。但衆生心によつて現す。衆生心は猶し鏡の如し。鏡若し垢あらば色像現せず。是の如く衆生若し垢あらば法身現せざるが故に。

已に衆生即ち主體に理性あり、客體阿彌の恩寵は周遍せるも、論に云ふが如く、衆生の心垢によつて關係し致一する能はず。然るに人の垢質已に信論に述ぶるが如し。

恩寵は積極的に神的機能あるが故に、人の素質とは自ら差別ありて、之を一致せしむるは恩寵によるの外他に之に換ふべき法あらず。

信論に、佛法因あり緣あつて具足して辨ず。木中の火性も若し人の方便を假らざれば自ら木を燒くなきが如く、衆生も亦正因佛性ありといへども佛菩薩知識等の緣に遇ふにあらざれば自ら解脱靈化すると云ふ理あるなし。

人の恩寵の要素は、經に說くが如し。阿彌陀佛を說くを聞いて名號を執持するなり

初めは宗教的憧憬にして、彌陀の聖名を聞いて、自ら漸次に薫習して、聖種となり、其衆生の正因佛性に遺傳恩寵の素因ありて、(幼稚の)外薫習力によりて薫發して佛種子を萠發するあり。或は聖經を披き或は聖典を聽く等の中に、要素を薫じて因緣相合して聖胎を成ず。

恩寵は親躬的精神練達より成るものと、また遺傳恩寵が顯動の素因豫備となつて自ら發展し易き素性なるあり。

恩寵喚起即ち資料に正行五

此五正行は恩寵喚起より發展實行に至るまでの過程、常恒に宗教正行に離るべからざるものなり。

導師は行に就て信を立つとす。

一、讀誦正行　阿彌陀三經聖典ともに阿彌の事相にて宗教事業につき、依正二報の莊嚴より性能を宗教表明的に說き給へり。

恩寵の喚起として資料として要素を成すべき聖文を常に諷誦しまた解說し、事相の修養の要は觀經によるべし。又は即ち佛知見啓示し、其啓示の證明には觀經最とす。常に之を讀むときは、自ら感覺的啓示の要素と成り、眞金の相好圓滿して端正無比なるをおもふ。また小經は讀誦に便なり。要素を略此經によりて印燒するもまた得たり大經、法藏行因等は感情的信仰の爲に或は悲壯の感を起さしむ。また實行信仰の行相も之に(　)

聖經は能く衆生に客體の性能を敎へ、心を開導して宗敎開發の資糧となる常に讀誦すべし。

二、禮拜正行　禮拜には專ら阿彌陀佛を禮するに恭敬心をもて佛目前に在すが如くにおもひ、昏晨の敬禮かくべからず。禮には古來三品の禮式ありといへども、必ずしも儀式によるにあらず。眞實の恭敬を以て禮とす。禮拜は自己を降伏して聖意實現を

欣ふにあり。主我罪惡の衝勤を伏滅し恩寵を仰ぎて主我を脫却して神聖と正義の自己に發現せんことを祈るために懺禮すべし。已に造れる罪は悔い改めて、(敢)作らざらんために眞實を吐いて發露懺悔し、常に聖意の現はれんことを祈るを以て禮拜の主とすべし。罪惡を改悛して、至善を鞏固にすることを用とす。

三、觀察正行　專らに阿彌陀佛の正報或は依報に專注し、觀察思想憶念すべし。是また意思を專一に集中して、消極的には他の思想異念を排斥し、初めは感覺的の啓示たる阿彌の眞金色に圓光徹照し端正無比なるを想ふ等、是また行住坐臥を問はず專ら凝神して止まざる時は、或は頓速に、或は漸次に、觀想成就して、正境を見ることを得ん。慈雲懺主の行儀に示すが如し。若しは公務の爲に朝に仕へても、商估の市に馳る者も、すべて僧俗を問はず、日々の針路にかゝはらず、常に意を注いで、正境を思想する時は、漸次に純熟して、一旦豁然と貫通して、三昧成就するを得べし。

四、稱名正行　導師の、一心に專ら彌陀名號を念じて、行住坐臥に、時節の久近を問はず、念々に捨てざる者、是を正定の業と名づく。彼の佛願に順ずるが故に。

此の稱名正行は、然師の曰く、一切の萬行の中最も最勝にしてまた簡易なり。此の二義によつて萬行に選んで稱名を本願となすと。

勝とは名は體を徵召す。

即ち佛の四智、三身、十力、四無畏、十八不共法、乃至、相好、光明、說法、十方無碍の利生、悉く名の中に攝在す。聖名に緣つて聖意を徵召す。故に常に專ら恩寵を聖名に表明す。無限の光明萬德を(　)實現せんことを祈るべし。

南無の一念に自己を無限の光壽に歸命して、大我の中に自己亡じ、融合致一は消極の方面にして、已に阿彌に安立し、神聖靈化の意志としては念々に實現し、不斷に活動し、神的行動は是稱名の正行の三業實現なり。初めは內面の實現としては啓示にして、感情は融合と成つて自己の苦毒と罪過の中より脫却し、意志には靈化として即ち阿彌の化現として神的活動すべし。

一念彌陀なれば一念の佛、念々〳〵彌陀なれば念々〳〵の佛。

已に理想には一念啓示の一念に觀念的に致一す。

然れども其實現のため、煩惱との健闘には、阿彌の光明の幡のもとに勇壯に戰はざるべからず。

五、讃嘆供養正行

若し讃嘆するには專ら阿彌を讃嘆し、一切の讃嘆にも内面には阿彌を讃へて神聖正義恩寵を讃じ、自己の煩惱の劣悲麁惡を毀賤し、讃嘆の故に自ら神聖を愛樂し慾望す毀賤するが故に主我の罪惡をすつるにいたる。客觀にも主觀に讃嘆する聖意を發表するが故に、阿彌の聖德の榮光を現す。聖意の實現たる行動は悉く阿彌を讃美するなり。其光榮を顯すべきなり。

供養には香花燈明等の末より、種類甚だ多きも、自己の主我及び一切の屬性たる煩惱を捧げて、己を以て最とす。理想に於ては更生改革の一念が消極の供したる精神にして、其の後の神的活動は念々にさゝげ、さゝぐるが故に自己にもまた聖糧のたまものに念々〳〵養はる。

元來圓滿に充塞せる聖意に受動的の供養なし。是れ自己の意象を表するに過ぎず。心は念々に捧げ、また身を以て犧牲とすべし。已に牲へたる身なれば自己の恐に阿彌の外に仕ふべからず。阿彌の範圍内の神的行動は是阿彌の犧牲たるものゝ義務たり天職たり。

五正行は信仰の喚起より開展、また實行的信仰に於ても、濟度過程の資糧として決して離るべからざるものなり。

已に佛性あり、遺傳の素因あり。即ち含畜的にして木に火の性能あるが如し。而して法界緣起、即ち客觀的に流布せる聖典及び（　）緣じて其寫象により喚起せらるゝ爲に實在的に進み行くなり。恩寵の喚起とは意識の蔽へる皮殼を破りて萠發して諦らかに恩寵と意識するにあり。

主觀の含畜恩寵は即ち佛性の性能に加へたる遺傳要素を含畜し木に火の性能あるが如し、而して客觀には法界緣起世界に流布せる法規として木に火を傳ふるが如くまた第三には助成規定。

喚起の規定は、最一大本質は絶待理性、所謂、有佛無佛、性相常然にして、本來周遍なり。是は理論的にして、次に正しく喚起の規定、及び宗教意識の發達は、世界道德秩序即ち宗教として行はれ、世に流布せる法規あり。

第一、即ち客觀規定。是は一般に廣く祖先より行はれ來り、第二主觀の法規は自己の祖先よりの遺傳より來り、第三の助成法規は個人發生的發達の過程なり。

第一の大氣中に吸收せる宗教素質が、自己の祖先の信仰規定との、此の二より合して、自己の素因となり、加ふるに自己の善知識に遇ひ、又は種々の信仰激發の緣によつて道心發達す。

四神足

道品に於て、小乘聲聞の道諦のと、其形式に於ては同じきも、其の内容に於ては天地懸隔す。

四神足は又如意足ともいふ。此四法は已に五根增長して喚起して、常に恩寵開發の加行の前方便にして、開發して初めて眞理を見るを見道と名づく。其の前に豫備すべき處の法規なり。

此濟度過程に於ては常に恩寵により自己の惡質を脫し、聖靈眞心態を開顯すべき行道たることを忘るべからず。

要すべき四法とは、（一欲。（二念。（三勤。（四慧。

一、欲。

欲望又は志願なり。欲樂なり。謂く一切の事業にして深き欲望なきときは、發達す

べきものにあらず。今は主我及び幸福主義の世俗欲望を棄捐して、專ら阿彌の聖意を憧憬して、常に高きに向つて欽仰し、渴して水を希求するが如く、飢えて食を望むが如し。世間一切有爲法、悉く夢の如く、幻の如し。畢竟じて眞實あることなし。また惡毒なり、罪惡なり、惑障なり、畢竟して依屬に耐ふものなし。唯絕對眞理は獨り阿彌の恩寵のみと、內に薰習せる佛性及び信根の素養あり、內に充て開展せんと欲する神的衝動となれば、また神的欲望と名づくべし。

二、念。

念とは宗教憧憬の益々增長したる意思にして、すでに恩寵の喚起の資料念根增進し神聖的戀念止むことなし。(然師の、我はたゞ佛にいつかあふひ草云々) 法華に其心の戀慕するに依つ便ち出でゝ爲に說法すと。資料深く薰染し、道心內に充ち、二六時中念頭に繫らざるなし。寐寤未安。斯の如き神的戀念は自己を離脫して恩寵獲得に進達すべき衝動なり。活動力なり。

三、精進。

(威師の勇猛學ぶべし) 修行にして勇悍にして又剛( )にあらざれば貫徹し難し。いかなる艱難に處するも道を求めて堅正にして卻かざる。

大經に『願を彼れに發して所欲を力精せむ。たとひ身を諸〳〵の苦毒の中に止くとも、我が行は精進にして忍んで終に悔いざらむ』と云へるが如き、又『譬へば大海の如きも一人升量して劫數を經歷せば、なほ底を窮めて其の妙寶を得べし。人至心あつて精進に道を求めて止まざれば、會ず當に剋果すべし。何れの願か得ざらん』と。斯の如き勇猛なる意志を備へざるべからず。必ず道成就すべし。

四、慧。

慧は巧慧なり。欲望し、戀念し、勇悍に策進するの內容を開展し阿彌の性能に協ふべき巧慧なきときは、開發し難し、例へば精神的本質の內に求得せず、物質の中に發見せんとするが如き、とても得べきにあらず。慧よく巧に知見し開發す。譬へば、よく他の啓示を得たるを聞き、または聖典によりて客體の本質を巧みによく寫象し、之を投影するが如き、また阿彌の屬性に至るまで、慧にあらざれば寫象する能はず。慧なき者は本質內容に到達する能はず。(表面の) 皮殼に執して

また眞理と非眞理とを簡擇すること能はず。宗教的天才は世智にうときものにしても、特別性の自然なるものあり。

五　根

聖種を養ふべき素因は、已に一般大氣中及び遺傳として稟受す。而して正しく佛性開發して、顯動態に發達せんには、專ら注意して修養せざるべからず。

客體恩寵は已に阿彌陀佛の性能なることを說きぬ。聖種子を養はんに五法あり。之を五根と名く。

此の五法よく自己の機能の發達すべき恩寵を修養する處の根にして、喩へば樹木の根あつて倒れざるが如く、壞せず、またよく恩寵を增長せしむる功能あり。故に根と名づく。

一、信根。

信は澄淨また印可の義。何を信ずべき、即ち阿彌の本質性能神聖正義の正因の性は、恩寵の緣因を深く信じ、之によつて恩寵を喚起するは、彼の聖名により聖意を仰ぎて、無限の愛によつて助けられ、必ず開展すべきことを深く信じて疑はず、深く信ずる故に信增長す。

二、精進根。

深く信ずる恩寵及び屬性を增長せんがために勇猛に專精に進趣す。

自己の惡質を排除し恩寵の增進に進趣す。阿彌は淸白にして自己は垢穢、垢穢の心質を脫して、精白靈妙また神聖正義によるこころを長養す。故に精進根と名づく。

三、念根。

專らに阿彌の恩寵及び屬性を憶念明記して、聖名によりて聖意の實現せんことを常に念じ、同時に消極的にはすべての念を排除し、譬へば貴重なる貨財を遺失するに之を注意して尋ね求むるが如く、恩寵の內容に實現せんことを戀念して止まず。

四、定根。

聖意を戀念愛慕止まずして念根增進するときは、一心寂靜となりて、人專ら一事に意を注ぐときは他の雜念なきが故に、一心寂靜なり。一心靜慮にして淸然なるが故に、聖貌現前す。聖境によるが故に正定增長す。

五、慧根。

簡擇を義となす。即ち一心寂靜にして正境を止どむ。慧はよく之を照してあやまたず。よく阿彌の性能を知りて他と阿彌によると否とをよくえらみ擇んで眞理をとりて他を捨てるなり。此の五根は恩寵を修養し增長せしむる資料なり。

五根の要素は阿彌陀佛本性能及屬性なりその絕對と個人との關係にやしなふなり。

宗　趣——體

佛知見開示して知力的機能致一。
心情解脫して融合入眞我。

開展——佛知見

恩寵開展の先驅として、人の意識に入り來りて、新しき感發として、從前の無明の夢を覺醒して、初めて佛知見啓示として、神的活眼を開くべきものにして、

導師定善義に、

行者一心に靜慮に攝心するに、初めに業障の輕重を知り、而して觀じ、五大皆空にして唯識大のみ有つて淸然として凝住す。猶し圓鏡の如し。內外明照にして朗然淸淨なりと。此の想を成す時、亂想除くことを得て、心漸く凝定す。然して後

徐々として心を轉じて諦かに日を觀せよ。其の利根なるものは一座にして即ち明相現前するを見ん。境の現ずる時に當つて或は錢の大きさの如く、或は鏡の面の大きさの如し。此の明の上に於て卽ち自ら業障の輕重の相を見る。一には黑障、猶し黑雲の日を障ふるが如し。二には黃障、又黃雲の日を障ふるが如し。三には白障白雲の日を障ふるが如し。

衆の業障も亦是の如し。淨心の境を障蔽して心をして明照ならしめず三障盡く除きて所觀の淨境朗然明淨ならむ。

行者等若し彼の境の光相を識らずんば、即ち此の日輪の光明の相を看よ。若行住坐臥に禮念憶想して常に此の解を作せ。久しからざるの間に即ち定心を得て彼の淨土の事の快樂莊嚴を見ん。

心を標して日を見るに想を緣を除いて念々移らざれば淨相了然として現ず。初行者初めて定中に在りて此の日を見る時、即ち三昧定樂を得て身心內外融液して不可思議なり。

又行住坐臥、身口意業、常に定と合せよ。唯萬事俱に捨てゝ失意聾盲痴人の如くならば此定必ず即ち得易し。若し是の如くならざれば三業緣に隨つて轉じ定想波を逐ひて飛び、たとひ千年の壽を盡すとも法眼未だ曾て開けず、若し心に定を得る時は、或は先づ明相現ずることあり。先づ寶地等の種々分明なる不可思議の者を見ん。

諸〻の行者若しは想念の中に若しは夢念の中に佛を見るもの即ち此の義を成ず。

啓示の先驅なるは感覺的にして或は明相、或は華を見、佛の好相、又は瑠璃寶地等の種々の莊嚴を感ずるあり。

知見開示して阿彌の本質に適合すべき理性顯現するときは、從前の意象に性惡を見ることを得、譬へば曦光東に升るときは、明らかに萬物を照すが如く、佛知見の啓示は自己の心中のすべての垢質を發見するが故に、醒覺してよりは、進んで阿彌の中に

過せざる自己の罪惡の垢質を脱却せざるべからず。

波羅密即ち度脱の過程は、一時に止らず、いづれも中途に止まらずして、進歩すべきことは、般若の如し。醒覺より三業四儀の中に、時に應じ機會に隨て、修練せざるべからず。

已に佛知見啓示して客體の本質と性能とをよく認可して疑はざるが故に、信位となす。

阿彌の關係に本質意義に悟入し、其の眞理なるを證明するが故に信となす。この啓示によりて自己の内容として、自己全く絶對阿彌の自己なるを覺るが故に、信となす。

開發位

已に知見啓示によりて客體を證明するも、自己天然の主我及び天然の情操を轉依して全く阿彌の中に安住せざれば未だ解脱と云ふ可からず。

消極の解脱。人は天然的なる煩惱潛在して此の衝動より惡業を現行す。この煩惱の所在を認識せざるべからず。楞嚴に、阿難よ、汝胸中の賊の所在を識認せよ。汝誤ちて賊を認めて子と謂へり。爲に自ら解脱すること能はずと。又遺經に、煩惱の毒蛇睡て汝が胸にあり。當に屏除すべしと。天性として潛在せるを種子となす　是天然規定の主我なり。二に現行とは種子が緣に隨ひ時に應じて現實に行動する處の要素なり。人には理性ありて之を制御すべき使命を有せる意志は之を制御すべきことを怠るが爲に現行す。この現行に就いては意志は怠慢の罪あり。このうち種子は主我根本惡にして次は怠惰の罪なり。

意志は理性に背きて許客罪は不注意によりて、おもはずも現行を作るに至る。人は自己天性の惡には責任を感せず。この主我惡即ち種子の賊の潛在する處を認識せざるべからず。

人の三業の惡の現行あるは、一々の現行其のもののみならば、之を除くこと容易ならんも、其根本に種子即ち主我惡の賊あり、之を知つて之を處分するに非ざるよりはいかでか現行の源を斷たん。

自山意志あり。人は罪業の後には他の方へ行ひしをと欲するに至る事實は、此の顯なるを以て、良心の責に苦悶せざるを得ず。この苦悶の感動は脱却し轉依すべき動機となる。こゝに於て、如何にせば之を脱却せん。人は菩提即ち道德秩序を損したるを感せば、いかなる苦をも忍びて償はざるを得ざるを感じ、後に良心の制裁に服すべし。

すべての煩惱が現行によりて一々皆この現行あるは、其自己良心の道德律と衝突するが故に感ず。自己の良心は即ち本佛性。阿彌の分身として自己に含蓄せる大(　　)提の個にして、罪業は主我なるものと共に含蓄せる善と惡との衝突にあらずや。

罪惡は阿彌と反せるが故に、阿彌と融和せんには、之の罪惡を苦悶し、過去を悔ひ將來を慮る。

罪過感情の益々深きに隨つて、解脱を求むる情は又深くなり、罪惡の改革のために悔うるまよし。唯既往を悔うのみにして苦しむも、自克により脱却の爲めに改革のためにあらざれば益なし。若し此の感情を脱却するにあらざれば、融合の狀態にすゝむこと能はず、罪過解脱の要は阿彌眞我に安住せんが爲めなり。

現行の罪惡に苦悶せらるゝも、其の原動たる賊の所在を認識するも、これを滅殺するに非ざれば、安穩なる能はず。睡蛇出でば當に安眠すべし。未だ出でざるに眠るは是れ無慚の人なりと。

この煩惱を退治する心機は、之を認識する知力にもあらず、また之を苦悶する感情にもあらず、理性によりて煩惱に反應する意志にあり。

道德の增進するに隨つて煩惡に對する意志の動力發達して、罪惡を漸々に滅ず。

此の煩惱は根本惡の天性なる意志の性能にあり。煩惱に對する反情は本能感情的感動の性を有する惡を嫌忌す。

天然の根本惡を脫し、尙根元の主我は、所謂任運にして、末那の態といふべきものにして、俱生の惑とて、天然規定の法規にして、これをも滅殺の要を感ず。主我慾の罪過感情により、意志理性態は之を煩惱を滅殺せんとする自克によつて改善す。

之を脫せんとするも天性自ら度脫の能はざるを感じ、自己の煩惱を嫌忌するも退治の力なく、苦悶極まつて感情の最高頂に抗り、煩惱の過患を認識し、之を感じ意志はこの情操を轉化せざるべからず。轉換が消極の方面にして、其の中に積極の道心に化すべき恩寵による。

轉換

釋尊の當に正覺を成せんと欲するに先だつて、十魔の障礙を被りたるは、この所の消息ならん。

釋尊、伽耶の道場に於て一心を金剛石上に座して、當に煩惱を斷じて正覺を成せんとするに先だつて、即ち精神の大光明を奮つて自己心內の煩惱魔をして、汝を降伏するに非るよりは、無上の道意、即ち眞の道德情操を立つ能はずとの、理性の聲に、忽ちに主我の魔王は魔の屬性を率ゐて、交も動亂して道情を（　）れ亂さんとす。內容に顯出する愛欲の魔女は種々幾多の妖姿と巧言とをもて佛性の意志を媚惑す。順情の魔女を却くればまた同時に異方面の違情の瞋怒等及び一切の魔の屬性は醜穢にして見るべからず。人を害すべきの煩惱魔にて交も胸裏に紛擾して道意を侵害す。若しこれを滅殺するに制するに智力を以てす。斯の如く數多の魔屬あるも巨魁たる主我王を滅殺するにあらざるよりは、爭でか彼らを降伏すらんと。智力はかの賊首の主我を識

り感情の苦悶は毒箭胸中に紛擾して、道意の志は之を轉換せんとして、魔賊いかに奮戰すとも、終に主我を滅殺して、微妙の法を得て、最善を成ず。良心苦悶の魔も伏して初めて醒覺して、消極に天然の主我の命終り、永く三界の苦輪を脫し、轉依の積極の方面は即ち微妙の法を得て、正覺を成ず。

道心轉依の積極方面

恩寵即ち微妙の法があかねさす曉にしてこゝろ覺醒し、朗然として無明の夢醒めて、佛知見啓示して、從前の主我滅殺して、精神一轉し來れば、是絕對無限の壽の中なる自己にして即ち阿彌の智に心を投じ、情操一變して、轉化すれば、即ち阿彌の中の個人なりと醒覺し來つて、觀ずれば、主我は即ち眞我の外にあるなし。煩惱の性即ち菩提なり。この情操を離れて外に無上道心なし。

唯從前の世俗野卑の情操を轉じて、神的道情と化し、諸〳〵の煩惱悉く是菩提ならざるなし。是菩提を誤用して、自ら煩惱とし、即ち賊を認めて子とす。情操轉換すれば更生なり。更生とは情操轉化して阿彌の中の生命として生々活動するなり。

心靈開發

已に微かに曙光に接して、心靈めざめて從來の自己を返照する時は、實に我痴我慢の自分勝手の甚だしき自ら慚恥に耐えぬ感がある。未だ微光に接せざる程は、煩惱我が自己の闇と汚れと罪と惱とである事を自覺出來ぬ故に、靈我が喚起し心靈我が覺醒してからは、我煩惱の深重なる事が認めらるゝに至るから、大に奮發して靈體現前せんとの熱誠あり、然れ共是自己の能くする所ではない。日光を仰ぐに非ざれば、闇黑は明けがたく、强く如來に接觸せんとの願望は、益々煩惱我の業障深重なる事が感せざるを得ぬ。煩惱我が變じて聖我に更生せざれば、永遠に浮ぶ瀨なき事を想へば、益慈悲の親が戀しくなる。之が感情の信仰で如來を愛慕の念が切々たるのである。如來と共に在り離れざる身となるに非ざれば眞の安心は出來ぬ。如來と不可離の關係を心靈の花開ける後に得らる。心靈の花は七覺の枝に咲き匂ふ。

七覺支

信と念との五根を以て修養の功として、信心喚起したる心靈は、五根に養はれて益々發達して、心靈の樹が增長し枝葉益繁茂して、愈々心靈の花が開くべし。七覺は信心開發する心の作用である。

(一)擇法覺子とは己に信心が喚起されて、如來を我が有とせん我如來の有とならん我如來の中に入らんとする。然れども自己の胸中には種々の妄想煩惱が雜起し聖如來の中に在る心は甚だ捕捉し難し、故に如來を眞實に信じ愛する。初めは擇(　)して如來の中に佗の妄想煩惱の爲めに捕はれぬ樣に意を用ひねばならぬ。若し妄想邪念起る時は力めて夫を捨て專ら如來に專注す。

(二)精進。若し如來の光明の中には一切の靈、眞善美として悉く所有せぬはない。故に我を捨て如來を取り、勇猛精進し、靈は如來の子であるけれども、魔の眷屬たる煩惱我が跋扈して、如來と我との共に在ることを妨ぐ。そこで自己の罪惡を自覺するに隨つて、業障懺悔の苦悶が深く感ぜらるゝ。刻苦奮勵は恰も鑛垢から純金を煉り出す如く、靈性の實現に力むるのである。

如來の靈相彷彿として在るが如く亡きが如くに感じらるゝ。信念强ければ魔の障も隨つて强い。未だ毫も信心開發に心力を用ひざるものには、業相もまた感ずる筈がない。

種々の業相現前するも敢て意に介せず、靈性現前に突進す。若し我如來靈相を得るに非ざれば寧ろ死すとも動かじと一心金剛の如くならば何ぞ成功せざらん。例へば學業技藝等も熱誠に精練する時は必ず成熟すべきが如くに靈性發揮に熱注せば必ず成就す。之を精進覺子とす。

(三)喜。喜とは三昧定中の前驅として現はるゝ心的現象にて三昧愈深く心念益微にして、靈妙なる定中の喜樂を感ず。此の甚深なる定の歡喜は未だ禪味を實驗せぬ人には想像も出來ぬ。

(四)輕安。定中の喜樂を覺え、彌々純熟するに隨ひて、融明にして不可思議、身も心も如來の中に溶け込みて、苦樂の束縛から脫け出で、我が亡じた處に、無限の愛と喜に充されて、而して無限に抱かれて之と融合した處に身心の輕安を感ずる。

(五)定。身心共に大我に融合して、身心共に亡じたる如くなれ共、其すべてが絕對に沒却してしまつたのでなく、靈我を通して無限の大光に接するのである。神氣清朗にして片雲なく、麗日天に赫き照すこと極まりなく、神秘の靈感、佛我に入り我佛に入りて、八面玲瓏として、內容の歡喜言ふ可からず。如來の愛に充され喜に充ち、三昧中に全く大愛に充滿され、全部が如來に抱擁され、歡天喜地、是三昧正に發揮したる狀態である。

(六)捨。已に全く大我の中に自己の全部を攝められて、自己の心と大靈と合してよりは、必ずしも意志の集中を要せず、任運自然に如來と離れず、已に常恒任運に三昧中に在りて、如來心の外に我無きに至る。初めには靈悅は失ひ易し、細心の注意を要す已に純熟久しければ、無意識的にして佛と共たり。之を捨と云ふ。

(七)念。念とは已に如來心中の自我なれば、如來の泉源より流れ出づる我心念である故に、佛心即自心、自心即佛心、念々佛心と相應す。否佛心が自己の心を通じて發す。

啓示の三種

一、感覺的

佛智見開示せらるゝ所觀の表象は、大乘佛教の如くの三味の觀相に豐饒なる宗教には、啓示の表明なる即ち所觀の境相甚だ多し、擧るに遑あらず。今三種の表相を明さば、

宗教的客體との關渉に、即ち三味の中に先驅として、意識に發現し來るものは感覺態なり。感覺といふも主觀的なるは言を俟たず。

導師觀經疏に、三味の中にありて、五大皆空にして、唯識大のみあつて、湛然として凝住す。猶し圓鏡の如し。內外明照にして、朗然淸淨なりと。此の想を作すとき、亂想除くことを得て、心漸く凝然として、後除々として、心を轉じて、諦かに日を觀ずれば、其利根なるものは一坐にして即ち明相現前することを見ん。境の現ずる時に當りて、或は錢の大の如く、或は鏡の面の大の如く、此明の上に自ら業障輕重の相を見ん。

行者若し彼境の光明を識らざれば、此日輪の光明の相を看て、常に此解を作さば、久しからざる間に、即ち定心を得て、彼の淨土の事の快樂莊嚴を見ん。

又行者、初め定中に在つて此日を見る時、即ち三味を得、定樂を得て、身心內外融液にして不可思議なり。

觀經に寶地觀を說きて、瑠璃地の內外映徹せる下に、金剛の七寶金憧ありて、瑠璃地を擎く等、此想成ずる時一々觀じて了々に開目閉目に散失せざれ。若し三味を得れば彼國地を見ること、了々分明にして具さに說く可からず。

觀經の日想と水想とは假觀また方便觀とす。日と水との經驗材料に凝神し、其の寫象を反映して成就する時は、念に隨ひ意思に隨て顯現す。

瑠璃寶地と寶樹觀、寶地觀、總觀は、依報莊嚴と名づけ、此を觀ぜんには、若は聖

經により、或は曼荼羅變相の表相を印象し記憶し、自己に印象したる表象を投映して專想凝神し、而して思惟の中に、思想し憶念して、覺想あらば、彼の相を見るも想心中見と爲す。思惟の位なり。益々進化發達して、覺相（　）止し、唯定心のみあつて前境と合するを正受と爲すと。

次に閉目開目に三尊の寶像、極樂界中に徧滿すと觀じ、心眼開く〻とを得ば、了々分明に極樂國の七寶莊嚴及び佛菩薩の形像より光明を放つ、又水流光明及び化鳥皆妙法を說くを聞く。出定入定恒に妙法を聞く。出定の時憶持して忘れざれと。

導師曰く、然るに十三觀の中に、寶地寶華金像等の觀最も要たり。若し人に敎へんと欲せば、但此法を敎へよ。但此一法成ぜん者は、餘觀は自然に了するなり。

諸寶林樹皆彌陀無漏心の中より流出佛心是無漏なるが故に其樹も亦是無漏なり。

又眞身觀の阿彌陀佛身は眞金色にして相好光明照十方世界、佛相好光明、眉間白毫右に旋つて須彌山の如く、佛眼は四大海水の如く、靑白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出すること須彌山の如し。

阿彌陀佛には八萬四千の相好光明普く十方法界を照して、念佛の衆生を攝取して捨て給はずと。阿彌陀佛を見上れば即ち十方無量の諸佛を見る。

次に觀音勢至二大士の觀

次に自身淨土蓮華化生、花開く時、五百色の光來つて身を照すと思ふ。次に一丈六の像、池水の上に在るを觀ず、又阿彌陀佛身量無邊凡夫心力の及ぶ所に非ず。如來宿願力の故に、憶想すれば必ず成就を得、阿彌陀佛神通如意、於十方國、變現自在、或現大身滿虛空中、或現小身、丈六八尺、所現の形皆眞金色なりと。

是等は客體の妙色莊嚴を表明する感覺的啓示にして、已に又感覺の妙相を知見せらるれば、是よりは進みて、斯の如きの妙色莊嚴を表明せる客體の內容には、最上無比の內容、無上の智慧、無限の恩寵等なかるべからず。如何に其內容を觀し上るべき。

二、寫象的啓示

佛知見の啓示として、妙相莊嚴、嘖嘩煥爛なる感覺的眞觀より進みて、客體の內容を觀せんとすれば、寫象的ならざるべからず。

觀經には、初めに、依報莊嚴を觀じ、第九に至つて、正報妙相好を觀じたるは、寫象、即ち、阿彌の內容の無上智恩寵等を觀せしめんが方便なり。

宗敎意識の客體に對して、專心に憧憬するは、即ち客體の內容にあり。即ち無限の恩寵によりて、攝護せらるゝの愛念より、宗敎衝動の內容憧憬として、客體に關係を結ばんと欲するなり。然れども內容を戀念せば感覺的表明なる妙色相好を觀せんとするは是れ自然の理なり。而して妙色相好を觀ずる後は其無上の愛と內容を觀せんとするも、又理の然らしむる所なり。故に觀經は、初めに依報より正報に進み、正しく眞身觀には、阿彌陀佛の相好光明普く十方法界を照したまふことを觀せしめ、斯の如くに觀せしめたる所以は、無限の愛を表明したるに外ならず。この相好には自ら內容恩寵を表したり。無限の內容は言語說話を以て、其眞意味は表すこと能はず。

念佛衆生攝取不捨の、衆生の心機と客體の內容との關係を啓示の內容とし、攝取不捨の語を以て表したり。これに無限の意義を有せり。

導師この意義を釋して、衆生行を起して口常に佛を稱すれば、佛即ち之を聞き給ふ。身常に佛を禮敬すれば、佛即ち之を見給ふ。衆生佛を憶念すれば、佛亦衆生を憶念したまふ。彼此の三業相捨離せず。故に親緣と名づく。

聖問師曰く、觀行の人は佛を觀ずるも客體と主體とは此彼相待して觀見す。念佛の行者は無限の慈悲心中に在りて常に安住すと。

此の意は、實は此彼相待して感見するは、感覺的啓示にして、無限の智悲の中に常に攝取せらるゝを意識すれば、是寫象的啓示に接したるなり。彼此相待して觀見する主觀的なれば同一理性の發現に外ならず、然れども寫象の內容たる無限の愛を示さる

ゝは深密なり。また佛身を觀ずるを以て亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是也。無緣の慈を以て諸〳〵の衆生を攝したまふ。慈悲の恩容に接するときは自ら無限の大慈悲たることを感ず。

無緣の慈は、一切衆生もと、阿彌絕待眞心の衆生及び一切の世界なれば、阿彌は無緣の恩寵常に盡十方無盡の法界に充塞して、常に一切を開展して靈化す。一たびこの恩寵を感じたる後は、時として處として啓示に接せざるなき觀念を遂げん。

次に寫象啓示として經に示されたるは、大經の下に、若し衆生ありて、明かに佛智不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了する故に、七寶華中に自然化生すとは、是なり。諸智を明に了すとは唯知解に非ず、若し知解ならば誰人か解了せざらん。此智即ち一切智は、本法界に周遍して、衆生の心機に關係し、心機を開展して、阿彌の中に攝取するところの性能なり。信仰の中に此の理性に個人は開發せらるゝが故に、自然と絕對の阿彌の聖意に契合して攝取せらるゝが故に、全く深く心開展して、自己全く阿彌の一切智慧態の個人たることを明かに信ずるに至るものは、此勝智態に致一したるものなり。解了と眞理とは同じからず。たとい解了としては五智の義を理解せざる者にして、自然に信開展し、阿彌の內容と致一し、其の內容を若し解剖せば、全然自然智と契合せるものあり、文字に執する人の得て窺ふべき處にあらず。

寫象の啓示としては、或は佛の四智十力等を觀じて成ずるときは皆これなり。今は阿彌の宗敎客體を表明する處の屬性をもて、全悲全能と神聖と正義と恩寵となり。阿彌の觀念には、神聖體にして無上の權威を以て主體の內面に嚴臨し、眞理の光とし自己の良心を發現して神聖侵すべからず。神的命令とし無規定に道德態。

また正義としては、佛知見の、義務として正道に活動すべき光をもたらし、恩寵としては罪惡に沒びたる中より解脫して、無上なる無限の中に致一し靈化する處の理を示し給へり。

この屬性はもと絶對無限の個人現として含蓄的に啓示せられしが故に、もと絶對なれば個人現は意識の進むに隨つて益々明了に知見することを得べし。

三、觀念的眞心觀

三昧耶の中に直觀を超えて、又寫象を超えて、次に觀ずべきは、理想態即ち法身觀なり。觀念的法身觀は、絶對眞心の本體に對する觀念にして、絶對寫象の觀念に感覺性を排除し、概念を清淨にして一切を集中統一態にすれば觀念なり。

絶對觀念は總括具象的にして、感覺ならず、空的寫象の如く、統一的にしては一の理想なり。

絶對眞心に對する觀念にして、他の感覺的及一切の心念を超越したる不識精神態にして、華嚴の泯絶無寄觀、絶對觀念の、一切の省慮等を超えて廻絶無寄般若現前、言語道斷、心行處滅知を以て知るべからず唯證のみあつて相應す。心境冥合、冥心は智を遣り、方に玆に詣つて境明かに、唯證のみ致一すべし。知解の境に非ず。冥合するは眞證。證即境、意識生ずれば本質に乖き、正念を失ふ。

眞實理性。本自如然識亡智泯、是本眞。

此冥想的絶對眞心態理想は是客體の本體の表明に對する觀念なり。

初め、感覺的の啓示によりて初めて客體と關係致一たることを證明し、感覺的なるは客體の表面を表象し、次に進で客體の內面を省慮的に觀念し、神聖正義恩寵等の神的內容知見を與へられ、次に斯の如きの客體の本體眞身觀に凝神し、絶對寫象の感覺態と及び省慮等を除き、純粹理性態に智盡き意思斷盡する處、卽ち絶對眞心即ち客體の本體なり。

かく觀念するを順觀とす。

之を逆に觀ずれば、先づ淸淨法身即ち冥想觀の實體より次に屬性たる一切能一切智の神聖正義恩寵等の屬性をもて莊嚴し、至眞至善至美眞理の最勝たる神的寫象を觀じ、次に客體の感覺的に表明したる無盡の相好光明眞金色にして圓光徹照し端正無比なる無上の威神と光明とをもて智慧と恩寵とを表象したまうを觀ず。

更生

心の更生。宗教上の一大事は此心機一轉の更生する處にあり。即ち從來の煩惱我、即ち無智の我肉の我が全精神を支配したりしも、天性と理性との我が精神を支配せし無明の生活生死の生活が、神秘靈感三昧定中に、從來の肉我に死して、無明が覺醒して、靈我が顯現し、即ち光明中に生れ更りし此眞我顯現が、宗教の大事なる關門なり。禪の大死一番して見性したる時、基督教の聖靈に感じて靈に復活したる時なり。今は靈性開發して聖子に更生し、光明生活に入りし時なり。之を開發の位とす。

昭和二年一月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番